



晴天の心

立教186年5月号
大阪府富田林市寿町4-9-10

URL: www.tomiishi.net

TEL: 0721-23-3466 090-5243-4669



今年は花の便りが約2週間早いと思いませんか？

桜にしても、ツツジやハナミズキ、カキツバタにアヤメ、菖蒲ともう咲き出しています。

気温が例年よりも高いのが主だった原因なのでしょう。ただ、暖かい日があったかと思うと急に寒いくらいの日があるので身体がついて行きませんね。風邪ならまだしも、まだまだ新型コロナやインフルエンザは減っていませんから体調を崩したときに感染してひどいことになるかもしれません。

病気は誰しもなりたいたいと思ってなる人はいないと思います。まあ、仮病の人たまにいますが・・・

昔からの言葉として、「病は気から」と言われてきました。その「気」とは何なのでしょう？気の持ちようとか、気合い、気分などとも言いますね。

これって、人の感情の部分なのでしょう。「こころ」と言ってもいいのではないのでしょうか。「病の元はこころから」と、私たちは教えられています。

「人間というものは、身はかりもの、心一つが我がのもの。たった一つの心より、どんな理も日々にちにち出る」(おさしづ 明治22年2月14日)と仰せになっています。

身体は神様から借りて使っている、その身体をどう使うって返すのかは、その人のこころ一つにある。このこころをどう使うかによって、その使い方や行いを正して助けるために、身体に障りをつけて、間違っただ方へ行かないように導いてくれるのです。

ただ、多くの人はその身体に示された事柄を読み取ることが出来なくて思い悩み苦しんでいるのでしょう。病気になったとき怪我をしたとき、そのときのこころ使いを考えると意外ともしかしてこのことを教えてくださったのかと思えるのです。

【かりもの】 「思うようにならん／＼というは、かりものの証拠」(おさしづ 明治21年7月28日)とあるように、病んで初めて身体が自分の思い通りにならないことを知ります。

「たん／＼となに事にてもこのよふわ 神のからだやしやんしてみよ」(おふでさき第三号 40、135)、「にんけんハみな／＼神のかしものや なんとをもふてつこているやら」(おふでさき第三号 41)との「おふでさき」にうかがえるように、かきもの・かりもの教理の背景には、この世は「神のからだ」という世界観があります。

すなわち、神の身体であるこの世の一部をわが身の内としてお借りしているのです。したがって、世界と人体は一つの天の摂理に支配されていることとなります。

月次祭 5月19日(金) 午前10時～

婦人会例会 5月9日(火) 午前10時～



教祖伝逸話篇

8.一寸身上に

文久元年、西田コトは、五月六日の日に、歯が痛いので、千束の稲荷さんへ詣ろうと思って家を出た。千束なら、斜に北へ行かねばならぬのに、何気なく東の方へ行くと、別所の奥田という家へ嫁入っている同年輩の人に、道路上でパツタリと出会った。

そこで、「どこへ行きなさる。」という話から、「庄屋敷へ詣ったら、どんな病気でも皆、救けて下さる。」という事を聞き、早速お詣りした。すると、夕方であったが、教祖は、「よう帰って来たな。待っていたで。」と、仰せられ、更に、「一寸身上に知らせた。」とて、神様のお話をお聞かせ下され、ハツタイ粉の御供を下された。お話を承って家へかえる頃には、歯痛はもう全く治っていた。が、そのまま四、五日詣らずにいと、今度は、目が悪くなって来た。激しく疼いて来たのである。

それで、早速お詣りして伺うと、「身上に知らせたのやで。」とて、有難いお話を、だんだんと聞かせて頂き、拝んで頂くと、かえる頃には、治っていた。それから、三日間程、弁当持ちでお屋敷のお掃除に通わせて頂いた。こうして信心させて頂くようになった。この年コトは三十二才であった。



30.一粒万倍

教祖は、ある時一粒の粃種を持って、飯降伊蔵に向かい、「人間は、これやで。一粒の真実の種を蒔いたら、一年経てば二百粒から三百粒になる。二年目には、何万という数になる。0000 これを、一粒万倍と言うのやで。三年目には、大和一国に蒔く程になるで。」と、仰せられた。

42.人を救けたら

明治8年4月上旬、福井県山東村菅浜の榎本栄治郎は、娘きよの気違いを救けてもらいたいと西国巡礼をして、第八番長谷観音に詣ったところ、茶店の老婆から、

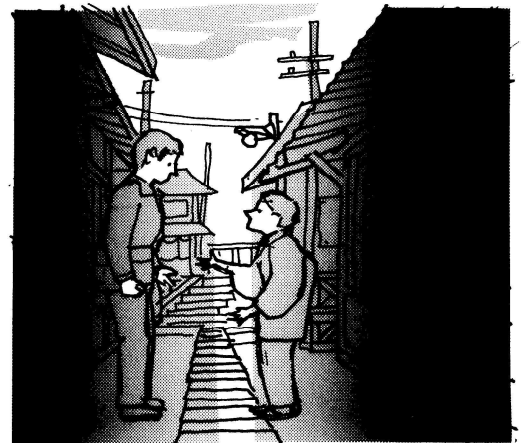
「庄屋敷村には、生神様がござる。」と聞き、早速、三輪を経て庄屋敷に至り、お屋敷を訪れ、取り次ぎに頼んで、教祖にお目通りした。すると、教祖は、

「心配は要らん、要らん。家に災難が出ているから、早ようおかえり。かえったら、村の中、戸毎に入り込んで、42人の人を救けるのやで。なむてんりわうのみこと、と唱えて、手を合わせて神さんをしっかり拝んで廻るのやで。人を救けたら我が身が救かるのや。」と、お言葉を下された。栄治郎は、心もはればれとして、庄屋敷を立ち、木津、京都、塩津を経て、菅浜に着いたのは、4月23日であった。

娘は、ひどく狂うていた。しかし、両手をあわせて、

「なむてんりわうのみこと」と、繰り返して願っているうちに、不思議にも、娘はだんだんと静かになって来た。それで、教祖のお言葉通り、村中にをいがけをして回り、病人の居る家は重ねて何度も廻って、42人の平癒を拝み続けた。すると、不思議にも、娘はすっかり全快の守護を頂いた。方々の家々からもお礼にきた。全快した娘には、養子をもろうた。

栄治郎と娘夫婦の参人は、救けて頂いたお礼に、おぢばへ帰らせて頂き、教祖にお目通りさせて頂いた。教祖は、真っ赤な赤衣をお召しになり、白髪で茶せんに結うておられ、綺麗な上品なお姿であられた、という。



今日の
おやのことば



「互い／＼手を繋ぎ道を通れば」

互い／＼手を繋ぎ道を通れば、
一寸もう夜を明ける道である。

おさしづ 明治21年7月17日

急いでいるときは、決して慌ててはいけません。時間が迫っている場合であるほど、むしろ慎重にならないと、かえってタイムロスになることがあります。

先日も本部神殿前で、危うく大けがをするところでした。始業前の参拝を終えて時計を見ると、もうすぐ1時限目の授業が始まる時間です。急がないと間に合いません。小走り階段を駆け下り、石畳の辺りで立拝して振り向いた途端に、ちょうど同じタイミングで歩いてきた年配の男性とぶつかりそうになりました。

驚いて立ち止まろうとしたために足が滑り、大きく転倒しそうになりましたが、目の前で男性が優しく手を添えてくださいました。ほとんど触れたか触れないか程度でしたが、おかげで体勢を整えることができました。

「互い／＼手を繋ぎ道を通れば、一寸もう夜を明ける道である」

あのとき、この男性が横に避けていれば、私は大けがをしていたかもしれません。自分も一緒に転ぶ可能性があるのに、手をそっと差し伸べてくださったおかげで、けがをせずに済みました。

相手に手を差し出すのか、それとも横に避けるのか、判断に苦しむ場合もあるでしょうが、結果はどうあれ、いつも互いに手を添え合いたいものです。

その場では、ゆっくりあいさつを交わす余裕もありませんでしたが、本当にたすかりました。ありがとうございます。(岡)

今年に入りあるおたすけに関わっています。

詳しいことは書けませんが、今までに経験したことのないまったく未知の世界のことです。病気や怪我のおたすけは今までにも経験してあざやかなご守護をお見せいただきてきました。今回は病気ではなく、事情たすけに該当します。

初めてのことでありますから、まずは、状況を把握する上で今までの経緯を書き起こし本人にも内容を確認していただきその上で専門家といわれる業種の人に相談に出かけました。専門家と言っても大勢おられますから、これも先輩の会長さんたちに相談して信頼できる人を紹介していただき、相談に出かけました。

本人がその場にいけない事情を理解していただいた上で、一般的な対応としての回答になることを述べられてこちらの話を聞いていただき、丁寧なアドバイスをいただきました。

やはり専門家は冷静に事案を考察され適切な答えを導き出されるのだと感心し回答を得られたことで、おたすけの方に生かすことが出来そうだと思います。

神様のされることは、いつも先回りして準備され待ってたでとちゃんと思索して通れよと、見せていただくことがあるから驚かされ見抜き見通しだと感服するのです。

今回のことでも、ある知り合いの女性が、私が掛かっているおたすけと真逆の立場の人を何とかたすけようとされているのです。ときどき会っては、状況を聞かせていただくことで、その方がどうやったら助け出すことが出来るのかを懸命の模索しながら対応されている内容が、私のおたすけにとっても非常にいい情報となっているのです。

タイムラグなしで、真逆の立場での考え方や対処を知ることができるなんて、神業以外の何物でもないと思います。まだまだ解決までには時間が掛かるおたすけではありますが、ちゃんと見守ってくださっていると勇んで取り組むことが出来るのです。

